東日本大震災
被災地支援
活動レポート

2011年6月、ザンビアにマタニティハウス完成。
ザンビアのママから東日本大震災で被災したママたちへ祈りを込めたメッセージが届く。

ジョイセフ
JOICFP
途上国の妊産婦と女性を守る

目次

1年間を振り返って　／P.1
①女性、妊産婦、赤ちゃんのための緊急物資支援　／P.2
②現地助産師の活動（女性、妊産婦ケア、健診、カウンセリング）支援　／P.3
③家族計画のサービス　／P.4
④被災産婦への義援金（2403名分）給付　／P.5
⑤市町村が実施する健診事業（乳幼児健診など）に必要な資機材教材の支援　／P.6
⑥女性や妊産婦が笑顔になれるさまざまなプログラムの実施　／P.7
継続支援の呼びかけ 広報イベント等の開催　／P.8
被災地支援　収支報告　／P.9

1年間を振り返って

2011年3月11日の東日本大震災から早1年が経過しました。被災地では復興活動に多くの皆さまが連日取り組んでおられます。そのご尽力に心より敬意を表します。

さて、私どもジョイセフも微力ながら震災直後から岩手県、宮城県、福島県を中心に支援活動を開始。個人や企業に広く募金の呼びかけを行いました。支援協力企業には妊産婦、女性、新生児のニーズに合った支援物資の提供をお願いし、まずは震災直後に上記の3県と茨城県に緊急支援物資を地元の助産師を通じてお届けしました。

この度の被災地支援は、強力な国内ネットワークを持つ(社)日本助産師会および各県支部、(社)日本家族計画協会との連携協力のもとで事業を実施しました。

震災直後から今日まで現地の助産師による妊産婦への産前産後ケアや震災後の心のケア、被災地の産婦人科医による家族計画のカウンセリング活動は、被災された妊産婦に直接届く支援となりました。またこの時期に出産した産婦への義援金(ケショ・1人5万円)は、昨年12月末日までに2403人に支給することができました。あわせて被災市町村の保健施設への医療保健機材等の提供も母子健診サービスの早期の再開のきっかけとなりました。さらには被災地の妊産婦が笑顔になれるさまざまなプログラムの提供活動も現地の多くの支援団体や全国の支援企業のご協力を得て行うことができました。この度は全国の多くの皆さまの支えがあったからこそ、このような被災地支援が可能となったと思います。また本支援では私たちが長年協力してきた多くの開発途上国からも、支援金が届き、私たちの心にしみるものがありました。今回ほど同じ地球に住むわれわれがお互いに支え合って生きているのだと実感できたことはありませんでした。「地球市民」としてまさに「お互いさま」であるということを痛感いたしました。

ジョイセフでは、2012年も微力ながら被災地の妊産婦と女性への支援活動を実施してまいります。引き続き皆さまのご支援ご協力を心よりお願い申し上げます。

公益財団法人 ジョイセフ 常務理事・事務局長
鈴木 良一

1 女性、妊産婦、赤ちゃんのための緊急物資支援

震災後、被災地の女性のニーズを把握し、ジョイセフは企業に無償提供を直接依頼する一方で、日本助産師会、日本家族計画協会、そしてオックスファム・ジャパン等の協力を得て必要な物資を調達しました。3月末にジョイセフは4トントラック7台の支援物資を岩手、宮城、福島、茨城の4県に送りました。震災から1カ月以上経過した頃、現場の助産師から、自宅避難している多くの母子が、避難所で受けられる支援物資もなく困窮しているという連絡が入りました。避難所ルートでもカバーできない母子に必要な物資を直接届けるために「母と子の元気市」を現地の助産師会と共催で宮城県の多賀城市と亘理郡の山元町で2回開催し、約1300人に提供しました。3月～5月末までの間に、合計50トン以上の支援物資が集まり、無償で協力してくれた企業は50社を超えました。

また、国連人口基金（UNFPA）からは女性に必要な物資を配慮した支援キット5000個の制作配付事業の委託を受け、避難所や在宅避難の女性たちの他にジョイセフの義援金の受給産婦にも直接送りました。

(1) 岩手県　内閣府の協力により、「もりおか女性センター」を緊急物資配給拠点にし、女性センターのネットワークと岩手県助産師会との連携協力により提供。

(2) 宮城県　宮城県助産師会ネットワーク（開業助産師部会中心）との連携協力で避難所訪問時に提供。多賀城市と山元町で被災した在宅避難している母子にも直接支援物資を提供する「母と子の元気市」を開催。

(3) 福島県　県北・郡山・会津若松保健所内に物資配給拠点を設け、保健師や助産師の避難所訪問時に直接提供。

(4) 茨城県　開業助産師の妊産婦訪問時に直接提供。

【物資リスト】

紙おむつ、生理用品、マスク、母乳パッド、生理用ナプキン、シャンプー、リンス、木製玩具（積み木）、女性用下着、衣類、マタニティ下着、子ども用衣類、ベビー衣類、ベビーおもちゃ、おしゃぶり、哺乳瓶、抱っこひも、搾乳用ケープ、布ナプキン、洗剤、粉ミルク、ベビーフード、ベビー飲料、おしりふき、絵本、妊婦帯、ブランケット（絵本とセット）、靴下、おむつカバー、新生児用下着、ベビーおよびマタニティスキンケア用品、ベビー日焼け止め、ベビー全身シャンプー／ヘアシャンプー、歯ブラシ、ハミガキ粉、授乳服セット、布おむつ、タオル、ベビー肌着、ガーゼハンカチ、助産師ゼッケン、防犯用ホイッスル、防犯用ブザー、子ども用菓子、女性用スキンケアクリーム、化粧品、ミネラルウォーター・飲料水　等

【支援キットを受け取った妊産婦の声】

今日衣類の支援品が届きました。忘れかけていた頃だったので嬉しかったです。品数も多くてビックリしました。丁寧にあんなにいっぱい詰めてたくさんの人に送っているから時間かかるんですね。子供にも塗れるクリーム嬉しかったです。本当にありがとうございました。

活動②のリーダー
（社）日本助産師会会長
岡本 喜代子

②現地助産師の活動（女性、妊産婦ケア、健診、カウンセリング）支援

必要なケアおよびカウンセリングの内容の検討と、支援条件の確定。助産師による活動を展開（家庭訪問（含む仮設住宅、早期退院ケースなど）、避難所訪問、おっぱいマッサージ、ベビーマッサージなど）
岩手・宮城の、2県の助産師に対する補助事業は2011年12月末をもって終了。福島県は2012年3月末をもって終了。

産婦人科医の少ない東北の被災地において、女性の身体に関する専門家である助産師の存在は被災地の妊産婦にとって精神的にも身体的にも大きな支えとなっています。被災後は、助産師が妊娠、出産、育児のケアだけでなく、多くのストレスと向き合う妊産婦を支えてきました。

助産師の仕事は多様ですが、ジョイセフは主に2つの活動に対し支援を行いました。それは避難所、仮設住宅を含む家庭訪問活動の交通費補助と助産院を訪ねてくる妊産婦に対する無償のサービスです。

地元の助産師は家庭訪問時に母と子に支援物資を提供すると共に、被災者の辛さや思いの言葉を傾聴し、心のケアとカウンセリングにつなげています。

ジョイセフの支援による、岩手、宮城、福島3県の被災した妊産婦・女性に対する助産師のケア・カウンセリング活動は2011年12月末現在の報告で、延べ684回の家庭訪問と、2177回の助産師によるケア・カウンセリングを実施しました。

【助産師の活動ノートの抜粋・要約】

- 震災のストレスで母乳が出なくなってしまった。
- 母親のストレスで赤ちゃんがおっぱいを飲まなくなってしまった。
- 夫が失業し、うつ病を発症したため、出産後早期退院をしなくてはならなかった。
- 夫が被災地支援活動に忙殺されているため、家庭内のサポートがなくなった。
- 母親の体調が不良である。
- 震災後のライフラインの回復が遅れたために、赤ちゃんのケアが十分できず、湿疹や肌荒れの症状が続いている。
- 夫と離れて母子のみで避難しているため、二重生活のストレスがたまる。
- 避難先で知り合いもなく孤独。
- 母乳をあげたいが、放射能汚染が心配で、ペットボトルの水と粉ミルクを購入、人工栄養に切り替えたい。
- 人工栄養に切り替えるための断乳。

ジョイセフ支援助産師活動実績（件数）
（県名の後のカッコ内数字は活動拠点数：2011年12月末現在）

活動項目	岩手県(4)	宮城県(15)	福島県(6)	合計
① 物資提供・打ち合わせ	16	0	19	35
② 避難所・家庭訪問支援	10	339	335	684
③ 助産院における育児相談	8	2,083	86	2,177
				2,896

この実績はあくまでも、ジョイセフが支援の対象とした助産師活動であり、被災地における助産師活動の中でのほんの一部にしか過ぎない。多くの助産師は、助産師自らが単独で支援活動を行ったり、緊急チームの一員として活動したり、市町村からの委託を受けて活動を行う等、多岐にわたって活躍している。

活動③のリーダー
（社）日本家族計画協会（ＪＦＰＡ）クリニック産婦人科医
北村 邦夫

【ＪＦＰＡ　クリニック産婦人科医　北村先生の声】

東日本大震災以降、日本家族計画協会（ＪＦＰＡ）クリニックが開設している電話相談には、被災地の女性から「ピルを飲み忘れてしまった」「産婦人科が被災してピルの入手が困難」「生理を移動したい」などの相談が相次ぎました。早速、「女性のための安心ホットライン」を開設し２万部のカードを作成。いろいろなチャンネルを通じて配布しました。内閣府の被災地支援サイトでも紹介され、情報が広がったのは嬉しいことでした。

しかし、ホットラインの開設だけで被災地の女性達の問題が解決するわけではありません。確実な避妊を継続したいと願う女性たち、月経困難症の症状緩和のためにピルを服用していた女性もいたでしょう。仮設住宅で不自由な生活を余儀なくされている女性達が生理を止めたい、生理日を動かしたいと願う気持ちは痛いほどわかります。「ピルを通じて被災地の女性たちを支援したい」と願い、長年培ってきた産婦人科ネットワークの利用を計画しました。被災地の産婦人科医と相談し、ピルを手に入れやすい環境を整備することができました。このプログラムを通じて約１０００人の女性達のお役に立つことができました。

③ 家族計画のサービス

対象地域の被災地の女性支援を目的とした情報提供体制を確立
専用電話回線を設置
情報パンフレットの制作と配付
５月～10月　ピルの提供
助産師との連携協力によるコンドームの提供

こんな時だからこそ、望まない妊娠を回避させたいという思いで、途上国のリプロダクティブ・ヘルスの推進を使命とするジョイセフは、姉妹団体であるＪＦＰＡとの連携・協力のもと、家族計画サービスを提供しました。

家族計画サービスの内容は、①経口避妊薬（ＯＣ）、②コンドーム、③情報の提供です。

①の避妊薬についてはＪＦＰＡのクリニックが中心となり、参加意思を表明した岩手、宮城、福島、茨城の４県の産婦人科医師と共同で配付を実施しました。

②のコンドームは㈱ジェクスから提供されたもので、緊急物資支援で提供した「女性支援キット」の中に入れて送りました。

③の情報提供については、被災した女性たちのための「安心ホットラインカード」を２万枚作成し、広く配付しました。

この活動は５月から10月までの６カ月間実施し、４県31人の産婦人科医が参加し、合計６９８４サイクルのピルと６０００ダースのコンドームを提供しました。

活動④のリーダー
（公財）ジョイセフ代表理事
石井 澄江

④ 被災産婦への義援金給付

2011年3月1日～12月31日までに出産した被災産婦の義援金（ケショ）の支給（1人5万円）を7月1日より開始。12月末日時点で岩手県、宮城県、福島県で被災した産婦2403人に対して支給。

被災地支援活動の大きな柱に義援金の支給を上げた理由は大きく3つあります。

その1は、予想もつかない困難な時期に出産を迎えた被災地の女性たちに、エールを送りたかったこと、その2はできる限り現金を被災地に直接届けたかったこと、その3は女性たちがわずかでも自分のお金をもち、自分の意志と判断で使途を決めることで、自信につながることを期待したことです。

一般的に義援金は世帯主名義の口座に送られますが、ジョイセフは前述の理由から「産婦の口座」に直接振り込むことを原則としました。

直接産婦に支給するジョイセフの義援金給付活動は大きな話題となり、2011年7月1日の開始日から、義援金問い合わせ用に設置した電話が毎日鳴り続けていました。

しかし、申請者数が当初予定していた対象人数をはるかに超えたため、資金面の点から最終的に本支援活動の締め切り期日をやむなく早めることになりました。

「ケショ」とはスワヒリ語で「あした」を意味します。

お母さんと生まれたばかりの赤ちゃんにとって、一日一日がよりよい「あした」になるようにとの、世界中の人たちの思いがこもった義援金であることを表すためです。

【3月20日に出産した小山さんの声】

予定通り仙台市のとも子助産院で出産しました。助産院も被災し、建物や家財が壊れて、停電も続いていました。暖房は使えなかったので、とても寒く、助産師さんたちはスキーウェアを着て私の出産を介助してくれました。大きな地震に備えいつでも逃げられる状態にしておく必要があったので私は服を着たままで出産に臨みました。分娩中にも強い揺れがありました。

ジョイセフの義援金（ケショ）のことは助産院のホームページとNHKやmixi（ミクシィ）で知りました。ケショの5万円で、地震で棚から落ちても割れない食器を購入しました。今は、専業主婦なので、自分に入ってくるお金、自由に使えるお金が無いのでうれしかったです。ケショは、堂々と夫にも「私が頑張ったのよ」と胸を張って使うことができました。

5 市町村が実施する健診事業（乳幼児健診など）に必要な資機材教材の支援

6月 各被災市町村母子保健担当者への支援情報提供およびニーズ調査実施
7月下旬～11月 機材の調達および提供

被災後に何らかの理由で母子保健に必要な機材の支援を受けていない市町村がありました。それらの市町村に対し、市町村の母子保健行政の担当者からの要請に基づき母子健診用機材を提供しました。岩手県、宮城県の4市、2町に保健医療機材等を提供するとともに、福島県の助産師会に対し、助産師の家庭訪問用キットを提供しました。

【宮古保健センター　助産師　小野寺さん】

このたびは、身長計、体重計、消毒用の小型滅菌器、胎児モデルをはじめたくさんの支援の資機材を寄贈いただきありがとうございます。

宮古市は、保健活動の拠点である保健センターが使用不可能の状況となり、健診や健康教室事業の資材のすべてがなくなり、どうしようかと思っているところへの申し出でありとてもうれしくなりました。

すべての事業の再開はできない状況ですが、乳幼児健診、こんにちは赤ちゃん事業をはじめとする家庭訪問等に活用させていただいております。

子供用の身長計は王冠がついており、子供たちから人気です。また、離乳食フードモデルを使っての指導は新米ママにとっても理解しやすいものとなっております。

【宮城県亘理郡山元町保健福祉課　菅井さん】

東日本大震災により、保健センターは救護所兼避難所となりました。当日は、外で一晩過ごした避難者もいました。地震により物品も破損しましたので、保健センターに設置されていた椅子や机、座布団、毛布等を外に運び出しました。地震により物品も破損しました。

保健センターの避難所が閉鎖したのは、平成23年6月10日でした。それまで保健事業を実施することができず、乳幼児健診は津波の被害のない地域の公会堂を借りて5月から再開しました。

体調不良の方に使用した予防接種用の酸素ボンベ等を支援していただき、11月から保健センターで予防接種も再開できるようになりました。震災で破損しましたが、提供していただいた離乳食セットも新しくいただき、乳児健診や離乳食教室で使用しております。支援には紛失してしまった机や椅子、座布団も含まれていて、現在、保健事業については以前のように取り組むことができるようになりました。

今年の冬は例年より厳しく、震災で故障したため、支援いただいたストーブも大活躍しております。

支援物資の一例ですが、本当にありがたく使用させていただいております。

6 女性や妊産婦が笑顔になれる さまざまなプログラムの実施

9月　被災地におけるニーズ調査と情報収集実施

11月5日　釜石市甲子小学校体育館で「HOPE for Mothers Café @釜石」開催

釜石市をはじめとする被災地からは、仮設住宅への移住により、妊産婦を含む被災者の多くが分散された結果、子ども達の遊ぶ場所はなく、母親がリラックスする機会もほとんどないという声が、数多く届きました。そのため、そんな母親達に、子ども達と一緒に楽しめ、被災産婦同士の交流により少しでもリフレッシュできる時間を提供するために、このイベントを企画しました。

産婦人科医師のトークショーや助産師による育児相談コーナー、子どもの遊び場、ミニコンサートなどへの参加を通し、ストレスの解消や癒しになる、また久しく会っていない母親達同士が交流できる「場」で交流を深めました。協賛企業による参加型プログラムとあわせて、アロマテラピーのサロンや手作りグッズの作成、地元の飲食店関係者による食事のサービスも提供しました。

【実施協力団体、岩手「ママハウス」スタッフの声】

被災地では高齢者の孤独が心配され、仮設住宅を行政や自治会などが巡回していろいろ支援しています。でも、そんな中でお母さんと子どもが孤立しています。狭い仮設住宅内で子どもと一緒に日中ずっと過ごしてイライラしても話し相手もいない、また、車も流され移動手段がなくどこにも行くところもなく、仮設から出られず、様々に淋しく辛い思いをしている人たちもいます。震災で沿岸の子育てセンターが流されたり浸水したりして、今やお母さん達の居場所は、平田第6仮設住宅のママハウスだけです。ジョイセフのイベントをきっかけに少しずつですがお母さん達の輪が広がり、ママハウスを知ってもらうことができました。ありがとうございました。

継続支援の呼びかけ 広報イベント等の開催

ジョイセフが2011年度に主催したイベントでは、途上国支援と合わせて、日本の大震災の被災地の女性に対する支援を積極的に呼びかけました。2つの大きな企画HOPE for Mothers およびMODE for Charity では、合計約700人が参加し、被災地支援金として620万2185円の寄付が集まりました。おもに産婦への義援金として活用しました。

また、チャリティーピンキーリングも、新たに1つ被災地の女子支援リング「HOPE」を追加制作し、販売しました。新聞、雑誌に紹介された後、ツイッター、SNSなどの口コミで話題を呼び、10代～50代の女性たちの幅広い支援層に反響がありました。また、11月よりクリスマスまで、チャリティーピンキーリングクリスマスを販売し、HOPEリングと合わせて合計1万6014個の被災地支援リングが完売しました。

母の日イベント　HOPE for Mothers ～被災地と途上国のお母さんに希望と笑顔を贈ろう～

日程：2011年5月7日（土）
場所、協力：恵比寿ガーデンプレイス
出演者：冨永愛、渡辺満里奈、土屋アンナ、大島花子、成瀬久美（MC）
運営協力：電通 GAL LABO

トークライブ、チャリティパーティ　MODE for Charity ～世界中のママのために～

日程：2011年12月10日（土）、19日（月）
場所：10日 ラフォーレ原宿、19日 国際文化会館
出演者：冨永愛、hitomi、土屋アンナ、マギー審司、大道寛子、大葉ナナコ、十河ひろ美、
大島花子、ジョセフィン・ムワンクシェ、政井マヤ（MC）
協賛：（株）ナチュラルサイエンス他
助成：IPPF（国際家族計画連盟）

チャリティーピンキープロジェクト　被災地の女子支援　「HOPE」リングとクリスマス3種リング

※1つにつき100円が寄付
HOPEリング　1万3958個完売
ピンキーリングクリスマス　2056個完売
160万1400円の寄付が集まり、
おもに助産師による活動（女性ケア・カウンセリング）支援金に活用しました。

被災地支援 収支報告（2011年3月～2012年2月末日）

事業活動収入

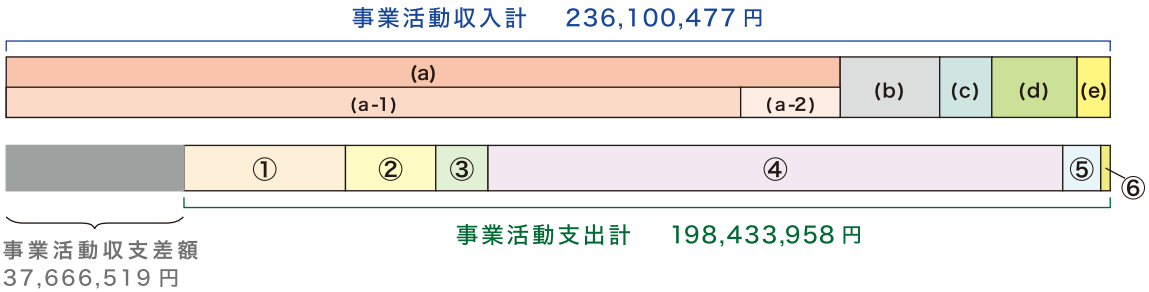
(a) 義援金・支援金等	176,751,659 円
（a-1） 国内（企業・団体・個人）	155,044,421 円
（a-2） 海外（企業・団体・個人）	21,707,238 円
(b) 国連人口基金	21,681,733 円
(c) パッカード財団	11,863,500 円
(d) オックスファム・ジャパン	18,000,000 円
(e) ジョイセフ広報イベント等による寄付（MODE for Charity 2011、ピンキーリング 他）	7,803,585 円
事業活動収入計	236,100,477 円

事業活動支出

① 女性、妊産婦、赤ちゃんのための緊急物資支援	34,803,490 円
② 現地助産師の活動（女性、妊産婦ケア、健診、カウンセリング）支援	19,842,794 円
③ 家族計画のサービス	11,863,500 円
④ 被災産婦への義援金（2403名分）給付（※振込手数料 964,946円含む）	121,114,946 円
⑤ 市町村が実施する健診事業（乳幼児健診など）に必要な資機材教材の支援	8,433,647 円
⑥ 女性や妊産婦が笑顔になれるさまざまなプログラムの実施	2,375,581 円
事業活動支出計	198,433,958 円

管理費について： 事業活動支出の内には、約9.3％の管理費が含まれています。
ただし、「④被災産婦への義援金給付」活動には管理費は含まれません。

事業活動収支差額（2012年3月以降の被災地支援事業に充当する）	37,666,519 円

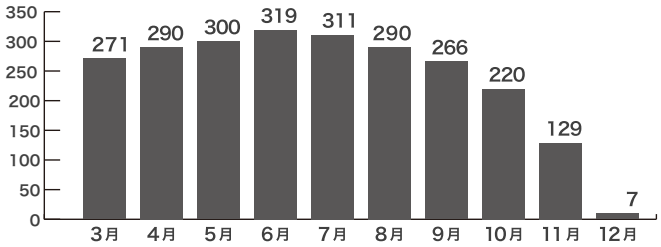


義援金（ケショ）支給報告（2011年7月1日～2011年12月27日）

県別支給者数

条件別支給者数

※ 警戒区域内で全壊1、半壊1



出産月別支給者数

引き続き、ジョイセフの被災地支援活動にご協力ください。

① 郵便振替

口座番号：00130-7-28122　　加入者名：(公財)ジョイセフ

※ 募金の種類を分けるために、郵便振込用紙の備考欄、または通信欄に、
「東北」とご記載ください

② 銀行振込

ゆうちょ銀行

店名：〇一九店（ゼロイチキユウ店）
預金種目：当座
口座番号：0028122
口座名義：公益財団法人ジョイセフ（フリガナ：コウエキザイダンホウジン）

三井住友銀行

店名：新宿通支店
預金種目：普通
口座番号：0922014
口座名義：公益財団法人ジョイセフ（フリガナ：コウエキザイダンホウジン）

※ 東北地方太平洋沖地震 被災地支援の方は、氏名の前に「トウホク」と入力して下さい。
例）トウホク＿スズキ タロウ

③ インターネットで寄付をする

PC向けホームページ：http://www.joicfp.or.jp
携帯向けホームページ：http://www.joicfp.or.jp/m

※皆さまからのご寄付は、個人の場合は所得税及び法人の場合は法人税の税制上の優遇措置が適用され、お申し出により税控除が受けられます。

※ 本書の一部または全部を無断で複写、転載引用することを固くお断りします。

2012年3月30日発行　　編集・発行：公益財団法人 ジョイセフ

〒162-0843 東京都新宿区市谷田町 1-10 保健会館新館　　TEL 03-3268-5875　　FAX 03-3235-9774
http://www.joicfp.or.jp